

読書カフェ

私のとっておきの一冊

～ 青春の1ページ～



DOKUSYO CAFE
VOL.2

2010年12月1日発行
発行 大学生協 京滋・奈良ブロック
〒606-8106 京都市左京区高野玉岡町23-3 TEL: 075-712-1156

「読書カフェ」の試み 時には恥ずかしいことも

読書というのは基本的にはプライベートなことです。とりわけ強制されたものではない教養的読書では、自分の興味に従ってすきに読めばいいのだし、読後の思いを人に聞いてもらう必要もないのですから。人が本を読んでいることは外から見えるけれども、「どう読んでいるのか」「その人の中で何が起きているのか」は見えないのです。だから、自分の行ってきた読書について語るといふことは、どこか恥ずかしい。しかし、少し低俗な意味でも、人には興味をそそられることかもしれません。

大学生協の京滋・奈良地域の教職員で組織されている教職員委員会では、教員がそれまでどんな本を読んできて、どんな感銘を受けて、いかなる影響を受けてきたのかという話を、学生のみなさんが聞く機会が意外と少ないのではないのかという話になりました。そこで、少しでも読書の面白さや意義とについて考える機会を作ろうと、この「読書カフェ」をはじめたのです。話す者にとってはプライベートなことを外に出す恥ずかしい試みなのですが、少しでも何かを受け取っていただければ意味はあるかもしれません。まだ五里霧中ですが、皆さまのご支援とご協力をいただければと願っています。

空気ではなく、 本を読もう

― 読書カフェ座談会 ―



→ 左から

川添信介 [京都大学教授]

小暮宣雄 [京都橘大学教員]

安田 寛 [奈良教育大学教授]

名和又介 [同志社大学教授]

読書カフェを引き受けた動機

名和 「読書カフェ」VOL. 1に川添先生が「読書カフェの試み 時には恥ずかしいことも」という、この企画の動機づけを書いてくださいました。自分の内面を語るといふ「恥ずかしいこと」というのが、この読書カフェのキーワードでしょうか。

川添 読書カフェというネーミングは誰がどうやって決めたのか忘れましたが、学生の読書離れが言われて久しいなかで、大学生協教職員委員会ではできないだろうかと考えた。大学というの書き手と読み手がいるところですから、自分の読書体験を赤裸々に語る場があってもいいんじゃないか。教師と生徒という「強制的」関係ではなく、ややプライベートなかたちで読書とはどういうものかについて語り合ってみよう、覚悟というよりはとにかく始めてみようということでした。実際やってみて上手くいったんじゃないでしょうか。他地域、大阪や東海地域にも広がっているようです。

小暮 僕は役人を23年間やっていました。その経験と大学教員になってからの今の学問の原点を考えた時、鶴見俊輔の「限界

共通の読書体験があると
結びつきがよくなりますよね。



芸術論』が浮かびました。僕のテーマはライブです。「ことば」も大事だが、直接体験としての音楽や美術、演劇に出会うことの大切さと読書というものの関係を話してみたいと思います。それと「カフェ」という表現にひかれた。読書することをライブで話し合うということが、僕が求めていた対面し合う関係性と結びつきました。

安田 この話が来る前に、大学の集まりで「自分の好きな本を持ち寄って披露し合おう」という提案をしていました。これが結構面白かった。「カフェ」という気楽さもいいなあと思いました。ウィーンのカフェ文化で育ったシュールベルトのことを想像したりもしました。それに「時には恥ずかしいことも」などという言葉を使う企画は間違いないと乗せられました。偉い先生が教えるを垂れるのではない。人と人が結びつくもの、男女の恋愛を例に考えると分かりやすいのですが、共通の音楽が好きだと上手くいく、そして共通の読書体験があると結びつきがよ

い、という環境に鍛えられた。大学でもそうでした。
川添 知的背伸びをすることが当然でした。いま、教師のあり方も、いい意味で権威的でなくなりました。学生に知的ギャップを感じられていないようだ。もっと勉強しなきゃ、もつと本を読まなければと思われなくなっている。教師も学生と同じ場に立とうとしている。昔は這い上がってこいという感じでした。

ドトスの『歴史』を英語で読んだ体験があります。4年間かけて。老若男女、年齢差の違う人の読み方を知り、複合的なものの方を学ぶことができました。二十歳過ぎの頃の体験です。
周りの評判を紹介しますと、最初に取上げられたアウグステイヌス、ヘロドトス、丸山真男、マルクスはやや硬かった、と。もうすこし若い層にとつきやすい短編を取り上げてよかったです。たんじゃないかという意見もありました。僕自身は堅くてもいい、それが僕の原点であることを語った訳で、それで噛み合わなければそれまでだ、とも思っていました。難しいからと逃げているだけだ。
川添 確かに大古典。しかし、結果的にそれがよかったという声もありました。変に若者におもねるのではなく、ストレートでいいと。

現代の読書状況をどのように考えるか

小暮 僕は中学時代、文芸部に入っていました。先輩に中島らもや高橋源一郎がいて活躍していました。もっと勉強しようとして吉本隆明やソシユールなど難解な本に挑戦しなければならな

くなりますよね。これこそが読書の力です。そういう話をしてもいい企画だったことも引き受けた動機です。

川添 確かにVOL. 1の4人はみな、一人で読んだのではなく、誰かと一緒に読んだ体験を話していました。読書会とか輪読会とか、今の若い人はそういうことはしないのだろうか。

安田 読書とは、ひとりで、密室でするものと考えますが、ふたりでまたは数人で読む場合もある。一人での黙読ではなく、数人での音読とか語りを思い浮かべて下さい。

名和 双方向のベクトルを持っています。一人で読むものであると同時に、人と人との交流でもあるという側面ですね。安田先生のご指摘にあったように、異性との関係に音楽体験と読書体験があるというのは面白いですね。

小暮 僕は家内とは本の話がきっかけでした。僕はこの本に感動したけど、彼女はどうかとためし、逆に彼女にもためされていたような…

安田 一番恥ずかしい体験だから、それを分け合う関係というのは深い関係ということになる。同じ共感をもってくれるかどうかが肝心。

名和 教育という関係の場では、別の視点も必要でしょう。僕の場合は、親戚にあたる森進一先生から読書会に誘われてへ口

い、という環境に鍛えられた。大学でもそうでした。
川添 知的背伸びをすることが当然でした。いま、教師のあり方も、いい意味で権威的でなくなりました。学生に知的ギャップを感じられていないようだ。もっと勉強しなきゃ、もつと本を読まなければと思われなくなっている。教師も学生と同じ場に立とうとしている。昔は這い上がってこいという感じでした。

言葉にできないものを
言葉にすること。



名和 昔は教師に威厳があり、巨人を見上げていたようだった。今はそういう環境が変わってきていることは確かですね。

ところで、安田先生の取り上げられたシュトルムの『みずうみ』は異色でした。

安田 先の4冊がすごかったから。西洋史あり、日本の社会思想史の巨人あり、最後のマルクスの『資本論』ときて、これはちょっと、この流れを壊してしまえ、という思いもあった。『み

ずうみ』はドイツ語の初心者向けのテキストですが、その内容は胸がキュンとする、永遠の青春のテーマです。僕は読書カフェの席で、自分の創作の一部や初恋の思い出を披露したり、彼女が好きだった音楽を流してみたのですが、学生は喜んでくれました。

名和 読書カフェの場を自分の創作の場として使った訳だ。普段の授業もそういう感じですか？

安田 ゼミではやりません。自分の思い出の曲を1曲持ってきてもらい、その個人的体験を語ってもらって音楽版読書カフェです。つまり本気でやれ、表面的なことや上手い下手ではなく、本当の自分の気持ちが出せるかどうか、ということに大事にしたいのです。さつき堅い本は敬遠されるのではという意見がありましたが、堅くても本気ならいいのです。そういうものが感動を与える。おもねってチャラチャラする必要はない。

名和 その点、我々の考えは一致していますね。

川添 安田先生、小暮先生は非言語的な芸術の世界に向き合っておられる。今の若者はどうだろう、活字以外のコミュニケーション手段や表現手段を身近に感じているのではないだろうか。

小暮 私は言葉にできないものを言葉にすること、もう一度、

安田 映画と比べると分かりやすい。映画は大勢の人でつくるが、たった一人で創作出来て、それに対抗できる力をもっているのが本だ。

小暮 僕は『限界芸術論』の初版やその後の版をいくつか見せました。装丁や体裁は初版が一番かっこいい、一目瞭然です。内容のどこが変わったかとかいう研究も大事だが、手触り感や時代よって本の姿が変わっていることも見て欲しかった。

名和 内容は同じでも、昔と今では本そのものが異なると。

小暮 コストの問題もあります。インターネット上の青空文庫のようにただで読めるものや、電子図書・iPadで読む読書とは違うと思う。

いいレポートを書いてくるのは、
本をきちんと読んでまとめている学生です。



川添 文字を記載するためのマテリアルとして、紀元後巻物だったものが、紙の冊子形態になったのは12、13世紀。これが

言葉ではない世界に戻ることにはこだわっています。あるまじろっこしさがつきまとうのも芸術の本質だろう。メールのような活字でない文字が氾濫している中で、きちんとした言葉を書きたい。

本、書物にしかできない中身が人間にある。
それを鍛えるのが本。



川添 ぼくは哲学をしているせいとか、断片的な知識やデータではなく、まとまった主張、かつちりした議論に触れることが大事だと考えています。

安田 メディアとして考えたら、BOOK、ドイツ語のBUC Hとはまさにそういうものですね。何千年という歴史があり、他のメディアにない、本でしかできないことがある。

川添 他のメディアでしか出来ないこともあるうし、本、書物にしかできない中身が人間にある。それを鍛えるのが本。

永遠不変の媒体ではないかもしれない。大事なものは書かれているものがどういう内的構造をもっているかであって、何に書かれているかはどうでもいい。iPadでも構わない、個人的にはついていけないでしょうが。

名和 大学生協が実施している学生生活実態調査をみると、生の読書時間、書籍費については、年々下降をたどっていて、悲観的なデータが多いのです。教師としてみた場合、インターネットなど情報源はたくさんあるだろうが、いいレポートを書いてくるのは、本をきちんと読んでまとめている学生です。限られた文字の中できちっとまとめる能力は読書で培われていると、体験的に強く確信しているのです。

川添 時間的に見れば時間も単価もさがっているのは事実でしょう。それをどう意味づけるかですね。読書以外の勉強に手段をきりかえているのかどうか、トータルな知識量の問題なのか。若い人は大事な力、能力を身につけようとしていないと危惧せざるをえないですね。小学生の朝の読書運動などがあって、少し持ち直したはずではないですか。

小暮 小さいときからの読書の習慣は大事でしょうね。大学生になってから読書をどう広げさせるかは、かなり悲観的な気持ちになります。

安田 60歳を過ぎて後悔しているのは、テレビを見るために使った時間と読書に使った時間のどちらが多かったのだろうか、ということです。テレビは麻薬のようにだらだらと見てしまう。それにコミックの誘惑。小学校4年のときに少年サンデーと少年マガジンが生まれましたが、今はコミックの誘惑がすごい。読書のライバルはコミックとネット。モーツアルトやバッハの全作品が入るほどのiphoneやYoutubeも現われ、その点今の若者がかえって不幸だと思います。活字から得られる感動、本から得られる感動から遠ざかっている。読書による感動が一番強く、一生続くほどの持続力もあるはずだ。

名和 育った環境の問題もありますね。
川添 情報理論からする情報量は膨大になった。しかし、そこから意味を読み取ることが大事で、その訓練をするにはやはり本がいい。

小暮 映画が1895年に生まれた時、動く写真だったということを学生は知らない。昔は活動写真だった。映画や写真が無かった時代はどうだったのかをかんがえてみると、時間がいっぱいあり、想像力を羽ばたかせることができた。想像力を働か

方法だというわけですね。

川添 いろんなアンケートでも読書がいいと答えている人は多い。ではなぜ読まないかといえば、何を讀んだらいいのか分からないという大学生が結構いる。なにかきっかけがほしいだけなのかも知れない。

今の若者は空気を読むというが、
空気ではなく、
本を読まなければいけない。



小暮 学生から「先生は、この教科書をどれくらい使ってますか」と尋ねられることがあります。出来るだけ安い教科書を指定したりはしますが。パワーポイントでパツパと済ますような授業ではなく、一緒にページをめくり、読み込む体験も重要だろうと考えています。まず戯曲を呼んで想像してみたら映像を見、さらにそれを言葉にする、テキスト化する授業が面白い。たとえば泉鏡花の古い戯曲を読み、それを古い文化施設で演劇観賞するとか。

さなくても、受け身で情報はいってくると、本来もっているはずの能力が低下してくる。そうすると今度は、あえてメディア断食を試みるという学生も出てくる。

安田 断食か。あえて飢餓状態に置く訳ですね。
川添 声しかなかった時代から文字の時代とはギャップがある。時間的にも空間的にも離れたところに情報が伝わるという大きな転換があった。常にメディアを豊かにしているという流れは止められないのかもしれませんが。人類史は、文字という抽象的な概念を想像させるもの、かつ創造させるものを作りだしてきた。

小暮 メディア断食じゃなく、メディア・ダイエットと言った方がいいかな。
安田 僕は断食の方が面白い。

川添 そうすることによってなにかいいことがあるとか、成功体験がないと。

安田 1週間ぐらいドイツに旅行するとそういう断食状態になりますね。メールは無視できるし、ドイツ語が分からないからテレビも見ない。いい時間が過ごせますね。日本においては、これはできない。

名和 すでに読書の意味とか、本質論に入ってきましたね。学生にそういう成功体験をもってもらうことが読書に近づきたい

川添 パワーポイントの弊害はあるね。全体の構造が分かりにくく、断片的でテレビ的。使い方だろうけれど。

安田 自分の想像力が関わっているかどうかです。テレビを見るのに想像力はいらぬ。本を読むのは、主体的に関わっていないければ読めない。人が書いたものだけでも、読み手は再創造する訳ですから。

名和 相当に主体的な仕事で、パワーが必要ですね。

川添 もうひとつの問題はネット上の検索の問題です。昔は一つ一つカードに書きとり、身体的に浸透させていた。今は指先一発で検索できる。便利だけでも、断片的で、脈絡ない知識・データです。ますます、まとまった本を読んで理解したりすることの必要が増しているように思う。

名和 受け身の環境の中では自分の主体性は育たない。自分はどう見る、こう読むという〈私〉がないと。読書は主体性を育てる、といえば言いすぎですか。

安田 いや、わがままを育てるといいたい。今の若者を表すことばで、草食系といいますね。女性からは「自分で告白しないで、相手に言わせようとする」という話を聞いたことがあります。

小暮 今の若者は空気を読むというが、空気ではなく、本を読まなければいけない。オチがついたかな。

名和 学生に読書の成功体験をどのように持たせ、今の教育をみんなで考えませんかと発信することが重要だと思いました。

小暮 教養というものを復権させることが大事でしょう。断片ではなく、体系を教える必要がありますね。

安田 教養という言葉は重いですね。それに取って代わった言葉は軽いです。リベラルアーツの根源とか、ドイツの教養小説とか、フランスの百科全書思想が教養という言葉の背後感じられる。

川添 読書カフェが広がっていくのは嬉しいことですが、僕らが若者に語るといのはややギャップがある。そこで、ピブリオバトルというシステムをご存じでしょうか。京都大学の情報学の院生あたりが始めたらしいのですが、数人で、ひとり5分間の時間内にある本の書評をしゃべり、だれの書評が一番読みたいと思ったかをコンペティションするというものです。つまり学生自身が読書体験を仲間に語りあう、交流するというライブのような場を作るのもいいでしょう。

小暮 京都橘学園生協は読書奨励金をやっています。

第5回



読書カフェ



鶴見俊輔 『限界芸術論』

(初版(1967)、のち文庫化) を読む

小暮宣雄 (京都橘大学教員)

こんにちは、今日、みなさんに紹介したい本は、鶴見俊輔さんの『限界芸術論』です。

わたしは10年前までは公務員をしていたということもあり、学生時代に出会った名著がそのまま研究者になっただけで影響を与えていたというような紹介はできません。公務員の終わりごろから、とくに、地域の芸術環境づくりとかアートマネジメントとかいう文化政策分野を担当しその勉強してきましたので、そこで、一番その考え方に共鳴し、いまの研究やフィールドワークにおいて実践しようと心がけるきっかけを与えた本を紹介したいと思いません。

「限界芸術」・・・多くの皆さんにとっては、はじめて聞く言葉

名和 学生諸君を読書にいざなう大学生協らしい試みですね。
安田 教師だけでなく学生も講師として参加する読書カフェの企画を提案をして実際に動き出しています。

名和 みなさん、有意義なお話と実践を聞かせていただき、ありがとうございました。初対面のメンバーでここまで話がはずむとは思いませんでした。今回の座談会はこれで終わりにさせていただきます。



かと思いますが、実は、この中のメインの論考「芸術の発展」(限界芸術の理念・研究・批評・創作)がはじめて発表されたのは、1960年の『講座・現代芸術』でのごとく、このユニークな芸術論は、すでに50年ほど前に発表されたということになります。限界芸術とは、一言でいえば、芸術概念の拡大です。いままでも芸術とはみなされなかつた分野、そして専門外とされてきた人たちの行為にも芸術を見ようという考えであり思想です。気がつけば描いていた落書き、ふと歌いだした鼻歌が実は既存の曲ではなかった・・・大人でもたまには限界芸術しているわけですし、子どもはいつも限界芸術家ではないか!というのです(また、芸術の起源も限界芸術であると説かれます)。

すなわち、西欧などのクラシック芸術が純粹芸術として尊重され、他方、人びとは手軽なポピュラー音楽やちゃんばら映画など大衆芸術を楽しんでいる、しかしながら、もっとさかのぼれば、芸術は、専門家ではない人びとによって作られしかも専門的鑑賞者でなくても一緒に楽しめたのではないか、という問題意識です。こちらに初めての単行本があります。発行年は1967年となっています。そのあとと数度、異なる出版社から発行されていて、この本の広範囲の影響をうかがわせますね。そして、この限界芸術の先駆者が3名紹介されているのですが、その人たちの本もここにおいておきました。

つまり、限界芸術の研究の先達としての柳田國男さんは、ご存知のとおり、日本民俗学の祖ですね。民謡の起り、名づけ・あ

だな論、昔話や妖怪話など興味深いですが、それらがすべて鶴見さんによれば、限界芸術ということになります。そして、限界芸術の総合デパートが村の祭りというわけです（著者は、娯楽映画を大衆芸術の総合デパートとして対比しているのですが、するとオペラは純粹芸術のそれということになるでしょう）。また、限界芸術の批評家としては、無名の陶工による雑器のよさを発見し、生活道具など民芸を大切にしていくな運動を起こした柳宗悦さんがフィーチャーされています。

そして、宮澤賢治。彼が、限界芸術の実践者となります。童話や詩歌は、純粹芸術に近いものですが、詩をあえて詩といわず「心象スケッチ」と呼ぶように、彼には無意識への関心、そして、「農民芸術」こそが、芸術の都市専有化と商売化に拮抗してあらねばならないという理念と実践がありました。とくに、修学旅行自体を賢治が芸術にしていくな過程は、いま読んでもびっくりするぐらいスリリングな先端的芸術でありかつ生徒たちの限界芸術でもあったことがわかります。

すなわち、この本は、1960年に発行され、大衆芸術の大切さ、身振りの話芸なども含めて多くの人の関心を刺激してきました。とくに文化社会学、風俗研究、カルチュラルスタディなどの分野が関心を示していました。最近ではわかり現代美術の批評家の方が、この概念を新鮮なものとして取り上げられたりもしています。

わたしは、一つには、芸術の公共性を考えるときに、この限界

芸術の復活や新しい展開があるのではないか、限界芸術は先端芸術によって刺激される機会をつくることで、先端芸術の振興にとどまらず、社会に大きなプラスをもたらすのでは、と思っていて、ユニークな紙芝居を障碍者とアーティストと地域住人や学生たちとつくるというワークショップ実践をしています。

また、限界芸術の事例としてあがっているお葬式やお見合い、墓参りをクローズアップして、冠婚葬祭（イベント）研究を限界芸術研究の一環として考え、いわば、限界アーツマネジメントの大事な事例ではないかという展開を行っているところ です。

以上、この限界芸術論の紹介とその読み方、展開事例をお話しましたが、みなさんも、発行されてから年月を経ても色んなところで引用され、古びないどころか、それが新しい土地に移植され思わぬ展開が行われるような、古典的あるいは刺激的な書物を見つけれることがとても大切ではないかと思えます。また、今まで紹介しましたこの限界芸術論の新しい展開がある新しい論稿とか、限界芸術を刺激するようなアーツプログラムの実践の場があったら、ぜひ、参加していただければありがたいなあと願っているしだいです。

*その先の読書のために

『限界芸術論』に紹介されている柳田邦男の民俗学や柳宗悦の民芸論、そして宮澤賢治の作品を多くの学生たちと読んでいきたいものです。旧いと思われがちですが、当時の最先端の科学・思想が、賢治ならではの想像力のもと素敵に融合しています。そして賢治の「農村芸術」とはなんだったかを一緒に考えたいと思っています。



小暮 宣雄【京都橘大学教員】

1955年大阪市生。旧自治省で地域政策、芸術文化環境づくりなどを23年間担当したのち、旧京都橘女子大学へ。公務員生活の終わり頃、どうして、アーツ（芸術）はヒトとともにあるのか。なぜ、ヒトはそれを必要としたのか。そんなことを考えているときに出会ったのが、『限界芸術論』でした。





読書カフェ

『みずうみ』と私

安田寛 (奈良教育大学教授)



『みずうみ』（原題：Imensee、1849年）は、ドイツの作家テオドル・シュトルム Theodor W. Storm（1817～1888）の短い小説です。日本では長くドイツ語のテキストとして使用されてきたせいで、フアンが多い小説です。

シュトルムは北ドイツの北海に面したフーズムに生まれた人で、その地域はデンマーク領になったりドイツ領になったりしたところです。弁護士として活動し、70歳で死去し、フーズムの聖ユルゲン墓地に葬られました。他の代表作として『白馬の騎士』があります。

私が音楽家を取りあえず目指し、人生を迷いに迷っていたときに出会った本で、それ以来、ふと無性に読みたくなくなって新たに買った

「『あなたはもう二度といらっしやらないのね』とついに彼女は言った」

全編でもっとも悲痛な場面である。エリーザベトは一晚中悩ましく、純粋な愛と母親の勧めるままの打算的な結婚とを天秤にかけたことを悔いていたのであろうか。詩人の理想と実業家の現実とに揺れ動いた自分の気持ちを嘆みしめたのであろうか。優しく、女らしくて、たおやかで、芸術家の気質を持った男性を愛することの出来る感情の細やかな女性として描かれているエリーザベト。ラインハルトは永遠にエリーザベトと別れた後、生涯彼女との思い出を大切にしながら、独身を通す。

「これでおしまいなんて、けっしてしないでね」と彼女は言っていたのだらうか。僕は何か言いかけただけで言葉にならなかった。ただ彼女をじっと見つめた。彼女は両親の視線や弟の怒りを込めた視線をかくくぐってじっとぼくを悲しそうな目で見つめていた。

■ 3 フーズムと私

僕は突然たまたまなくなつて、シュトルムが生涯の大半を過ごしたフーズムという町まで出かけていった。ハンブルグから列車に乗ってフーズムに向かった。人家が少なく、ときどき羊だか牛だかが点在している。着いた町は、赤や黄色の色とりどりの壁の色がきれいな西洋の童話に出てくるような町。この色合いは後で調べるとデンマーク風なのだとか。北海に臨む港には漁船が停泊し

ては読み返し、また無くして、また買つては読み直している本です。そうして私はいつもまた同じフレーズから読み始めます。これで何度目になるのだろうか、と思ひながら。

「晩秋のある午後のこと、みなりの立派なひとりの老人が、ゆっくり往来を下りていった」

この老人がこの短編の主人公で、彼の回想として初恋物語がはじまります。最初に、老人が研究に使っているこじんまりとした一室の薄暗く孤独なたたずまいが描写され、その後で、主人公に「エリーザベト！」と切なくささやかせています。

エリーザベトが主人公ラインハルトの仲の良い幼友達で初恋の相手です。エリーザベトは結局ラインハルトの友達で羽振りの良い実業家と結婚します。結婚後、ラインハルトは一度だけエリーザベトを訪ねます。二人の間に密かにやるせない感情が行き来します。二人はどうすることも出来ない。人生の選択は何が正しく、何が間違っているのか、誰にも分かりません。ただただ悔恨の惱ましい感情に包まれるばかりです。

■ 2 別れの朝

ドイツへ向かう飛行機の中で新しく買った『インメンゼー』をまた読んでいた。

永遠に別れることを決めた朝を待つ夜、二人は一睡も出来ずに別々の室で過ごしている。朝、ラインハルトは黙って出て行くこととする。そこへエリーザベトが降りてくる。

ている。静かな寂しい町だった。

ぼくは『インメンゼー』を読むとき、ラインハルトと自分とを、エリーザベトと大学時代の恋人とをいつも重ねて読んでいた。この本を読み始めた時は、丁度彼女との恋愛がはじまった時だった。僕たちは大学の真新しい視聴覚室で顔を見合わせながらドヴォルザークの新世界を聴いていた。後で彼女がシュトルムの『白馬の騎士』を貸してくれた。そんなわけだから、いつのまにか、シュトルムの町、フーズムまでが、ぼくたちの思い出と重なっていると思ひ込んでしまった。買ってはなくなり、なくては買ってを繰り返して、読んでいく内に彼女との思い出は、どんどんまだ見たことの無いフーズムの風景と重なって行った。だから、ぼくは彼女の面影を求めて彼女が恋しくてしかたなくフーズムまでそれこそ飛んで行った。

なのに、この美しい町のどこを歩いても、彼女の面影なんてどこにもなかった。広い通りにも、石畳の狭い路地にも、教会の尖塔にも、青いクロッカスが咲き誇っていた公園にも、漁船がたくさんつながれていた港にも。その向こうには寂しい暗い海が続くばかりだった。

季節はずれのがら空きのホテルの一室で一睡も出来ず、日が昇るとすぐに霧がたちこめるどんより曇つた寒い空の下、僕はお城跡の公園をむやみにさ迷った。やがて一面に咲き誇っていたクロッカスの淡い紫を長いこと見つめたまま歩けなくなった。紫の中に溶け込んで消えてしまいたかった。



読書カフェ

最初の自主ゼミのテキスト

ワトソン『遺伝子の分子生物学』

磯野高敬(滋賀医科大学准教授)



1973年に京都大学理学部に入學して、大学に入れば自主ゼミをしたいと考えていた。1回生の時は、当初は化学を専攻しようと考えていたので、ポーリング『化学結合論』やポールドウィーン『動的生物化学』を独学していたが、大学にも慣れてきて、2回生の時に、自主ゼミに参加した。その時のテキストがワトソン『遺伝子の分子生物学』であった。

この本は、上質紙を用いて綺麗で明確な図がふんだんに使われていて、当時としては、非常にビューティフルな本であった。目に見えない分子の世界を、図と文でしっかりとイメージさせるもので、初めて分子生物学に触れた学生にとって刺激的であった。

物語の最後は再び、侘びしい一室である。ラインハルトは暗い部屋でまたエリーザベトとの思い出に耽っている。そして最後の一節はこうして終わる。

「それから、彼はまた椅子を机のところに引きよせて、開かれていた書物の一冊をとりあげ、かつての青春の力をそそいだ研究にふけた。」

僕はラインハルトのように研究に没頭した。そして最初の著書『唱歌と十字架』を書き上げた。



安田 寛 [奈良教育大学教授]

1948年山口県生まれ。国立音楽大学大学院修士課程修了。現在奈良教育大学教授。著書に『唱歌と十字架』、『日韓唱歌の源流』、『唱歌という奇跡 十二の物語』、『日本の唱歌と太平洋の讃美歌』がある。現在最新作『アウグスト・フェルディナント・バイエル』を執筆中。美食家かつ偏食ならぬ偏読家。太平洋の捕鯨と唱歌の関係を研究中。

* その先の読書のために

『みずうみ』(原題: Immensee, 1849年)は、北ドイツのハンブルクからデンマークとの国境に向かう列車に乗ると行けるフーズムという港町で生まれたドイツの作家テオドル・シュトルム(1817~1888)の最も人気のある短い小説です。日本では長くドイツ語のテキストとして使用されてきたせいで、フアンが多い小説です。作家の故郷にある記念館を訪ねると、日本のドイツ語テキストが陳列してあります。

幼なじみである恋人との最後の切ない別れがクライマックスで、それから恋人を生涯忘れられずにいる初老の学者の回想の形式をとっています。センチメンタルでノスタルジーに満ちていて、同時代人で北ドイツのハンブルグで生まれたブラームスの交響曲に通ずるような胸をしめつける感情が迫ってきます。ブラームスはお好き、ですか？

人生の終わりにさしかかったとき、人はそれまでを振り返った時、いったい何を思い出すでしょうか。多くの人にとって若い時のかなわなかった恋ではないでしょうか。

この本は私が声楽家をとりあえず目指し、人生を迷いに迷っていたときに出会った本で、それ以来、時にふと無性に読みたくなって新たに買っては読み返し、また無くして、また買っては読み直している本です。そういう意味で私の人生に深く関わっている小説です。もしかしたら平凡だけにある意味むなししい私の人生にささやかではあるけれどほのかな意味を与え続けてくれた小説かもしれません。

分子生物学という新しい学問を、最新の成果を紹介しながら、論理的に展開されていて、モダンでアカデミックな雰囲気を感じさせていた。学生ながら学問の世界に足を一歩踏み入れることができたような気にさせる本であった。一言で云えば「読めば賢くなるような本」であった。

我々がテキストに用いた本は、第2版日本語版であったが、翌年、第3版英語版が出て、ポリリウムアップしていた。第2版では、主に大腸菌のシンプルな世界での分子生物学が記載されていたが、高等生物の細胞で展開される世界の部分が増加していた。これは、版を重ねることにポリリウムアップしていった。そして、大学院生時代に『細胞の分子生物学』に変わっていった。これが、版を重ねて現在の第5版となっている。大腸菌の分子生物学が、遺伝子工学という研究手段となつて、対象を高等生物の細胞に拡げていき、細胞の分子生物学へと自己発展してきた分子生物学の歴史的な経過に沿ったものであり、『遺伝子の分子生物学』が『細胞の分子生物学』に変わるのには必然の帰結であったように思える。ただ、現在の『細胞の分子生物学』は、ポリリウムアップしすぎて、辞典のようになつてしまつて、『遺伝子の分子生物学』の様な刺激性が薄まつてしまつたのが残念である。

さて、ワトソン『遺伝子の分子生物学』が名著であつて、筆者の世代に影響を与えたと言えるが、筆者が、この本を『読書カフェ』で取り上げたのは、最初の自主ゼミのテキストであつたからだ。自主ゼミは、人によって、テキストの読み方・見え方が違つてこ

読書カフェ VOL.2

menu



読書カフェ 座談会

語り手 … 川添信介 [京都大学教授]
小暮宣雄 [京都橘大学教員]
安田 寛 [奈良教育大学教授]
名和又介 [同志社大学教授]

第5回



鶴見俊輔『限界芸術論』を読む

語り手 … 小暮宣雄 [京都橘大学教員]
●日 時：2010年5月17日(月) 17:00~19:00
●会 場：京都橘大学 クリスタルカフェ

第6回



『みずうみ』と私

語り手 … 安田 寛 [奈良教育大学教授]
●日 時：2010年6月18日(金) 18:00~20:00
●会 場：奈良教育大学 生協食堂ホール

第7回



最初の自主ゼミのテキスト ワトソン『遺伝子の分子生物学』

語り手 … 礒野高敬 [滋賀医科大学准教授]
●日 時：2010年7月20日(火) 18:00~20:00
●会 場：滋賀医科大学 生協食堂ホール

とが面白かった。難しい内容を理解してドラえもん「翻訳コンニャク」のように説明して解説してくれる人、テキストの中に隠れている解らないことを見える人、テキストの内容を越えて我々には思い付かないようなことを考える人等がいた。自主ゼミを通じて、自分流の読み方だけでなく、1冊のテキストを何通りもの読み方で読むことができたわけだ。このおかげで本や論文を批判的に読むことができるようになったと考えている。

また、参加者同士、口角泡を吹くような議論をしても、討論でお互いを認め合える存在になれた。夏休みには、ゼミの夏合宿に出かけたりして、楽しく学べる沢山の仲間を作ることができた。ワトソン『遺伝子の分子生物学』の自主ゼミが終わった後も、学生時代は、引き続き、レニンジャー『生化学』の自主ゼミや岩波の生物学講座のテキストを用いた大学院入試対策ゼミを仲間たちと行った。そのおかげで、ゼミ仲間と一緒に大学院に合格できた。大学院生時代には、研究室にそれぞれ別れていたが、「生化学若い研究者の会夏の学校」の事務局を一緒に担うなどの繋がりを保った。就職で全国各地に別れていった後も、交流が続き、分子生物学会等で仲間たちと会うのが楽しみになっている。

ワトソン『遺伝子の分子生物学』は、自主ゼミのテキストにして読んで、今の研究の考え方の土台を築いてくれた学問的な財産となる本であったが、私にとっては、それ以上に、楽しく学べる沢山の仲間を作ることができた人生の財産をもたらしてくれた本だと思っている。このように振り返ってみると、ワトソン『遺伝子の分子生物学』にそれだけの力がある本であったと思われる。



礒野高敬 [滋賀医科大学准教授]

1954年兵庫県川西市生まれ。京都大学理学部で学び京都大学大学院へ。生協の活動をしていた同級生に誘われて、京大生協の読書推進雑誌「綴葉(ていよう)」の編集にかかわる。3年のオーバードクター時代を経て、滋賀医科大学微生物学講座の助手。実験実習支援センターに移って、現在准教授。実験実習支援センターは、ひとつの講座では買えないような高額の実験機器を大学全体で共有して、みんなで作るセンターで、生協と似た考え方と運営になっています。

*その先の読書のために

その後読んだお奨めの本

カーソン『沈黙の春』(新潮文庫1974年ほか)、
ドーキンス『生物II生存機械論』(紀伊国屋書店1980年)
『利己的な遺伝子』に改題、
セーガン『エデンの恐竜』(秀潤社1980年)、
スコフェニル『アンチ・チャンス』(みすず書房1984年)、
ジャコブ『内なる肖像』(みすず書房1989年) 『可能世界と現実世界』(みすず書房1994年)。

最後に、自分が今生物学を行っているのに影響を受けていると考える一番の本は、中学生時代によんだ手塚治虫の漫画『火の鳥』です。「生物」というよりも「生命」とは何かを問いかけたものでした。